

橋本の町と応其（おうご）



応其（おうご）

応其は近江（おうみ・滋賀県）の人といわれ、天正元年(1573)11月、37・8歳のときに高野山へ登り、日斉房（にっさいぼう）と称したとされています。高野入山までの経歴については明らかではありませんが、武士の出身であったといわれています。その後、名を応其と改め、穀物を断って草衣を着る木食行（もくじきぎょう）を行ったことから木食応其とも呼ばれました。

天正13年(1585)4月、豊臣秀吉は抵抗する根来（ねごろ）・雑賀（さいか）・粉河を次々に攻めて焼き払い、続いて高野山に降伏を迫りました。これに対して高野山を代表する使者の一人として秀吉のもとに赴いたのが応其でした。交渉のすえ、全山の滅亡を回避することができました。秀吉は「応其が高野山をたちゆくようにしたのであって、高野の応其ではなく、応其の高野と思うように」と話したとされています。この後、応其は秀吉の絶大な信頼を得て、秀吉の全国統一に力を尽くしました。

橋本のまち

また、応其は天正13年、この地に草庵を造ってそこに住まいするとともに、伊都郡古佐田村の一部であった荒地をひらいてまちを作り、高野往還の宿場としました。そして2年後の天正15年(1587)には旅人の便宜を図るため、紀の川に長さ130間(約236m)の橋を架けました。「橋本」の地名はこれによるものと伝えられています。橋は紀の川の出水のため、3年後に流失してしまいましたが、橋本の町の名は残され今も受け継がれています。

応其は橋本町の繁栄のため、天正15年秀吉から塩市を開く許可を受け、続いて文禄3年(1594)には今後さまざまな税をかけないという特別な扱い（「永代諸役免許」）が認められました。この免税措置は江戸時代にも継承され、橋本町のその後の発展につながっていきます。

秀吉と応其

高野攻めが回避された頃から、秀吉と応其の距離が縮まります。天正 13 年(1585)7 月、秀吉はその母の菩提を弔うため、応其に命じて高野山に金堂を再建しました。また、翌 14 年 12 月、秀吉の発願で京都方広寺大仏殿の建造がはじめられますが、これには応其の力が大きく、完成の際には応其が式典を主導しました。また、天正 15 年(1587)、秀吉の九州攻めに際して島津氏との交渉にもあたっています。このように、応其は秀吉の信任厚く、秀吉の意向を伝え、交渉する使者として、また、寺社の建築、さらには農業水利事業の担当者として秀吉のもとでその手腕を発揮してゆきます。

土木技術推進者としての応其

社寺の建造

秀吉の信任を得て応其はこの後、高野山御影堂・宝蔵・大門・興山寺、天野山王堂・御主殿・中門、京都東寺塔・講堂・御影堂、醍醐寺金堂・塔のほか、石山寺、室生寺、御舟宮（紀の川市三船神社）、兵庫寺等数々の社寺の建築、改修にたずさわり、その成果は「諸寺諸社造営目録」に記されています。僧としての活動のみならず土木工事の技術者集団を抱えたゼネコンの役目も併せ持った存在であったことがうかがえます。橋本では応其寺のほか上記のように隅田町下兵庫の兵庫寺（利生護国寺）の改修にも関わったことが知れます。

農業土木

「諸寺諸社造営目録」によると応其の関わった土木工事は社寺以外にも及びます。安楽川の井手（紀の川市）、名手の池（紀の川市）、笠田の池（かつらぎ町）、妙寺の池（畑谷池・かつらぎ町）、引の池（橋本市）、柏原の池（橋本市）、菖蒲谷の池（橋本市）など農業水利施設が記されています。また、橋本市隅田町垂井の岩倉池、同南馬場の平谷池、同高野口町応其の引の池、かつらぎ町妙寺の畑谷池の池畔には、応其によって改修されたことを記す記念碑が残されています。記念碑はこれらの池の恵みを受けた人々がその恩恵を後世に伝えるために建立したものです。このように、応其は社寺の造営のみにとどまらず、溜池などの農業施設の充実にも力を尽くし、これらの溜池は今も多くの耕地を潤し続けています。

文学者としての応其

応其は僧としてだけではなく、政治家として、また、寺社建築、農業水利事業者として広く活躍しているほか、文学においてもその才能を発揮しています。彼は和歌、連歌に対する嗜みが深く、特に連歌をよくしたといえます。

『無言抄』は彼のその実績から連歌の作法書として著されたもので、当代第一の連歌師といわれた里村紹巴（さとむらじょうは）の披閲を受け、当時の連歌の規定を集大成したものといわれています。連歌用語が豊富であるばかりでなく、いろは順の配列から引き易く、その後の俳諧式目書の規範となるものでした。橋本の応其寺には応其の自筆と伝えられる 2 巻 2 冊が現存しています。

晩年の応其

慶長 3 年(1598)5 月秀吉が没してのち、天下の形勢に変化が生じます。そして慶長 5 年(1600)関が原の戦いの結果徳川家康が勝利すると、応其は時勢を感じ近江国飯道山（はんどうさん）へ隠遁します。そして数年の隠棲の後、慶長 13 年(1608)10 月 1 日、高野一山の危急を救い、数々の大事業を成し遂げた傑僧応其も 73 歳でこの地で没しています。飯道寺梅本院跡地には五輪塔の墓碑が残され、地元の人たちによって今日に守り伝えられています。また、高野山奥の院にも応其上人廟があり応其を偲ぶことができます。